朽木開発援助政策論12・19　　Copyright:Takumin

確認程度だがミクロ経済学では弾力性に関してやった。
5 限に関しては用事のある人は帰ってよろしい。

弾力性の考え方をよく理解してほしい。あとは限界生産量低減について。

今日は規模の経済についてやる。
これはみんな頭では理解していると思われる。縦軸には平均費用（AC）、横軸には生産料を取った場合、始めた会のだが段々落ちるという U 字型のグラフを描く。つまり、あるてんで最低になり、また少し上がるというグラフだ。そういうやつについて今日は詳しくやってみる。
例えばビールを 1 個買うときと 12 個買うときと 20 個買うとき、どれが一本あたりの値段が一番安くなるだろうか？
たぶんスーパーに行くと、20 本入りの方が一番安いだろう。つまり、まとまった規模の方が単価が下がる、これが規模の経済というものである。

先週配ったプリントを見る。210 ページの図7．3．2を見る。

産出量	総固定費用（機材等）	総可変費用（労働・燃料等）	総費用	平均固定費用	平均可変費用	平均総費用	限界費用
1	100	10	110	100	10	110	
2	100	16	116	50	8	58	
3	100	21	121	33.3	7	40．3	
4	100	26	126	25	6．5	31	
5	100	30	130	20	6	26	

こういう図を先週も書いた感じ。これを各自項別にグラフに表すと、横軸に生産量、縦軸に費用をとると、固定費用に関してはずっと100の直線、可変費用は少しずつ上昇する感じ、総費用はそれらの総和なので、それに平行して上昇してゆく感じのグラフ構成になる。

ここからが本番。だって先週やった話だから、ここからが本番です。
問題はこの平均費用。今から平均固定費用、平均可変費用、平均総費用、限界費用を赤字で上の図表に示す。
平均固定費用＝総固定費用÷産出量
平均可変費用＝総可変費用÷産出量
平均総費用＝総費用÷産出量
という計算式なので、それぞれ計算すると、上図表の赤い値になる。

それぞれをグラフに表すと、縦軸に費用、横軸に産出量をとってかく。

この時に、さっき話した「規模の経済」、つまり平均費用はどんどん下がってゆくという規模の経済、その一番の原因は、固定費用だろうか？可変費用だろうか？どっちだろうか？
おそらく固定費用だろう。
では、製鉄所、製粉所、冷凍庫、固定費用がいちばんかかるのはどれだろうか？実はこの順に高いのである。つまり、製鉄所は規模の経済の性質が非常に強いといえるのである。これを資本集約的といわれる。日本では資本集約的な機械はなかなか導入できない。なので、例えば、ホテル一個作るのに、2000 億円かかった。まぁ実際の例でいうと日本の援助によってバングラデッシュにホテルを造った。
問題はこのホテルが規模の経済に達することが出来るかである。規模の経済に達しない規模のホテルを造った場合には割に合わないことになる。それを市場の失敗という。

話を変えよう、民間と国立の病院の違いはなんだろうか？民間は潰れるかもしれないが、国立は潰れない。重要なポイントは、市場の失敗が起こるかどうかである。そのポイントとなるのが公共財、規模の経済である。
重要なのは援助とかを考える際に市場が失敗しているかどうか、これが重要なポイントで、その判断基準に規模の経済というのがある。そして平均費用が産出量が増える毎に下がってゆくということを覚えておいてほしい。